

戦後80年

令和7年度 南国市戦没者追悼式

先の大戦で亡くなられた方を追悼し、平和を祈念するため「令和7年度南国市戦没者追悼式」を11月15日に開催し、約70名の遺族が参列しました。平和作文は香長中学校を代表し、久保 択斗さんが朗読されました。



曾祖母が見た夕焼け

香長中学校2年 久保 択斗

父から大変シロツクな知らせを聞きました。それは私の曾祖母が余命半年だということです。医師からは、「末期のガンで手のほどこしようながない」と言われているそうです。

だから、曾祖母が生きているうちに聞かなければいけないことを聞いておこうと思いました。その時に頭に浮かんだのが、今年が戦後80年であるということです。曾祖母は戦時中は小学生だったそうです。

徳島県にある曾祖母の家に行き、直接、戦争について心に残っていることを問いました。すると曾祖母は「1945年7月4日の夜、徳島の中心部の街が震えるぐらい燃えていて、まるで夕焼けのようだった。夕焼けは、とてもきれいに思っけれど、あの赤い空は血のよつな真つ赤な色をしていて、とても恐ろしかった」と話していました。それを聞いて私は「空襲で燃える街の炎が夜空を赤く染めるなんて、なんて恐ろしい光景だろう。」と思わず身震いしてしまいました。曾祖母は翌朝のこと話してく

れました。「街の方から、顔や手が真っ黒になった人が何人も何人も一本の道を泣きながら歩いているのを見た。私は、その光景が恐ろしくて、水を飲ませてあげることすらできなかった。」と話していました。私は自宅に帰って、「徳島空襲」について調べました。徳島市の中心部は約6割が焼け、死者は約千人、負傷者も二千人にのぼる大きな被害を受けたことが分かりました。曾祖母が翌朝見た、火の粉をかぶって、真っ黒くなった人たちは、一体どこに行つたのか、命は助かつたのだらうかと、今の私が思うのもおかしいですが、とても心配に思いました。

現在、放送されているNHKの連続テレビ小説「あんぱん」でも、高知の街が空襲を受ける場面が出てきました。調べてみると、高知空襲と徳島空襲は1945年7月4日の同じ日に、空襲に遭っていることが分かりました。高知の街も大きな被害を受け、400人以上が犠牲になったそうです。

曾祖母から聞いた戦争の話は、この他にも「あんぱん」と重なることがあります。曾祖母の父も兵隊になり戦地に行かなくてはいけませんでした。それは主人公の柳井高が兵隊へ行くときの場面と重なりました。心の底では「戦争へ行

たい」と思う人はいなかったと思います。曾祖母は「父が兵隊に行くとき、母も私もバンザイ、バンザイって言っていたけれど、母も私も心の中では泣いていた。それは、戦地に行く父も同じ気持ちだったと思う。」と語っていました。戦争というのは、戦地に行つて人を殺すだけではなく、人の心まで嘘をつかせ、殺してしまうものなのだと思います。

病気の曾祖母は、あとどれくらい元気にいてくれるだろうと、毎日心配しています。「あんぱん」が放送中で、その中で戦地の話があり、今回、あの戦争を直接知っている曾祖母に話を聞くことができました。曾祖母が体験した戦争は、私の心にしっかりと刻まれました。

「何のために生まれて、何をして生きるのか」。これはドラマ「あんぱん」で柳井高の伯父が言っていた言葉であり、アニメ「アンパンマン」の主題歌の歌詞にも出てくる言葉でもあります。「戦争をするために生まれて、戦争で死んでいく」。そんな世の中は、絶対に存在してはいけないと思います。

※この作文は夏休みに書かれた内容です。

にこにこライフ

223

— 岡林 満男さん —

優しいまなざしで 花と向き合う 式典の陰の立役者



現在、成人式をはじめ市内の式典などを彩る花を生けている、南国市廿枝の岡林満男さん。40歳のころから生け花を続けてきた岡林さんに、お話を伺いました。

生け花を始めたきっかけは、本当に偶然です。当時よく通っていた居酒屋の店内に飾られていた花がとてもきれいで、誰が生けたかとママ(店主)に聞いてみたところ、「私よ」と教えてくれました。詳しく聞くとう店主は長年生け花を習っていて、「教頭」と呼ばれる指導資格を持つほどの腕前でした。その店主から「岡林さんもやってみたら？」と勧められて、高知の「遠州」の支部長を紹介してもらいました。「遠州」は「池坊」や「草月」流と並ぶ流派の一つで、月4回の稽古に通うようになりました。

続けているうちに技量も認められ、京都の平安神宮で行われる「花神祭」に作品を出す機会もいただきました。稽古に通い続けて6年ほどで他の方に指導できる「教師」の資格を取り、「自分もようやく形になってきたかな」と思えるようになってきました。

「遠州」で大切にしているのは、「自然の形を生かすこと」です。花を生ける剣山の代わりとなる枝がある場合はできるだけ枝を切らずそのままの姿を使い、剣山なども必要ないとき以外は使いません。教えてくれた支部長が元庭師で、自然を尊重する考え方が基本にあるからです。

6年ほど前からは、高知の花展で大作を一人で担当することにも挑戦しています。大作は3時間もかかる大変な作品ですが、昨年や一昨年の高知新聞に作品が掲載されたときは、本当にうれしかったですね。

現在も依頼があれば式典や催しで花を生けていますが、市内の卒業式を任されるようになったきっかけは、鳶ヶ池



南国市社会福祉大会で花を生ける岡林さん

専門的な言葉もひとつひとつ漢字から意味まで丁寧に教えてくれる岡林さん。穏やかな語り口からは、花と向き合ってきた年月が静かににじんでいます。

式典の華やかさを支えるその一枝には、岡林さんが重ねてきた技と心が、そっと息づいています。